

## 東北地方日本海側の陶磁器の様相

山口 博之（山形県埋蔵文化財センター）

中世出羽国の陶磁器の様相について概観したい。地域的には現在の行政区分のほぼ秋田県と山形県の大部分がこの地域にあたる。十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏の関連、東北地方の陶器生産の様相、十五世紀から十六世紀の陶磁器の様相などを中心として扱う。

十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏



この時期の陶磁器は、中国を産地とする陶器や白磁を中心とする陶磁器と、出羽国在地産の陶器、広域に流通している珠洲などの国産陶器、そして土器であるかわらけが存在する。8世紀から11世紀までの貿易陶磁器の数量は非常に少ない。増加するのは12世紀代の後半になってからである。白磁碗Ⅳ類を代表とする白磁の碗皿類、白磁四耳壺、劃花文青磁碗などの組成が見られる。この様相は、岩手県平泉町の平泉藤原氏に關係する平泉遺跡群の組成に似る。

平泉遺跡群から見いだされる主要な陶磁器の器種構成を八重樫忠郎は「平泉セット」と呼び、その分布から平泉藤原氏との深い關係を読み取ろうとしている。しかし「平泉セット」を、出羽国の中で見いだすことは多くはない。平泉では多用される東海系陶器はほとんど持たず、わずかの手づくねかわらけや白磁、日常的な甕・壺・播鉢は須恵器系陶器で構成されるセットが、十二世紀の日本海側出羽地域の特質をよく表している。こうしたセットこそが出羽国では一般的な組成をなすものとなる。

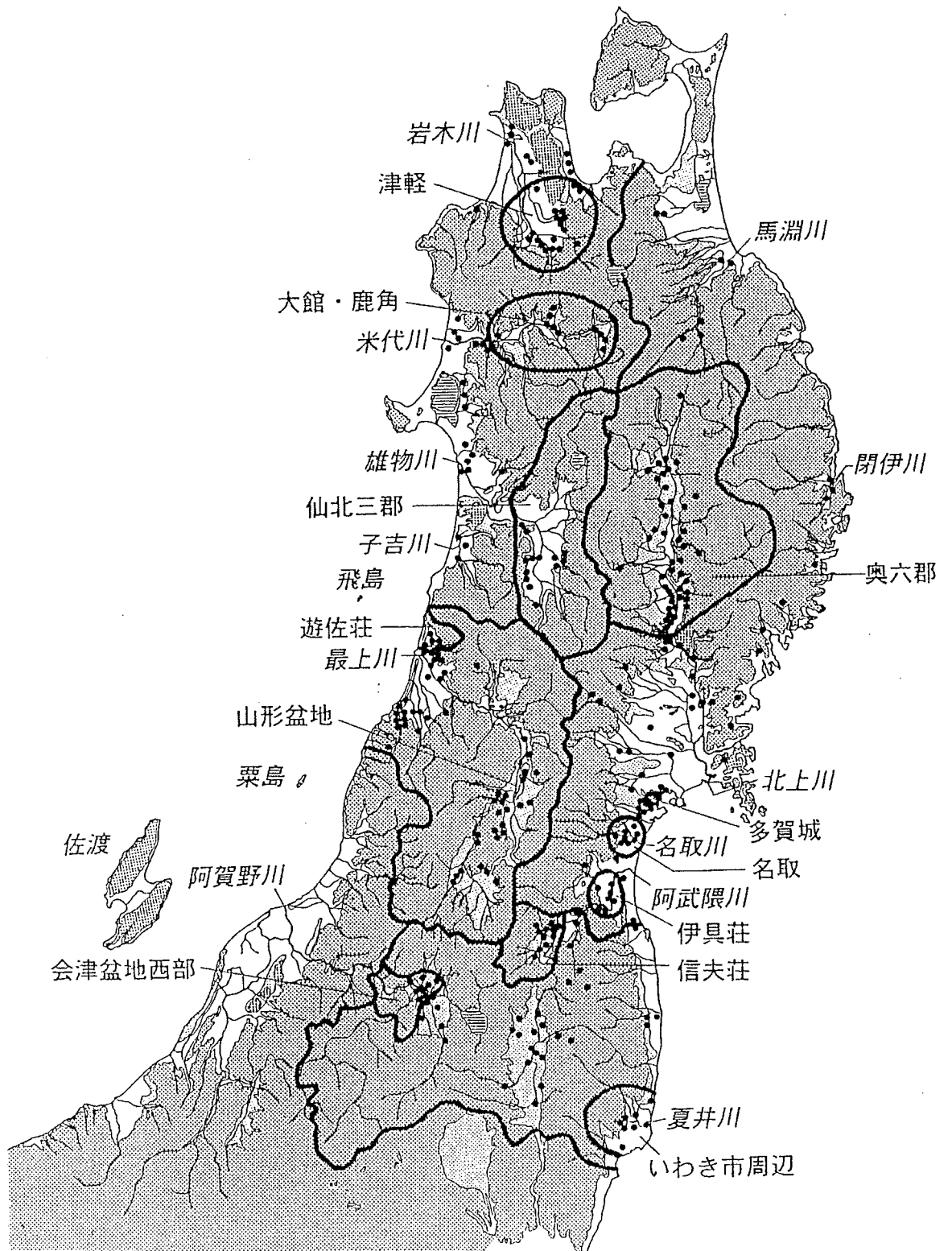
東北地方の陶器生産

奥羽の陶器窯跡では、大きく分けて11の窯跡群を見いだすことができる。この地域の陶器生産はやや断続的にはあるが、12世紀半ば前後から14世紀前後までの約150年間にわたって営まれている。列島の中の中世陶器窯の動向とこの地域は無縁ではない。奥羽の陶器窯の主な供給先は、数郡規模のものと数国規模のものに分類することができる。宮城県地域の瓷器系窯は分布が狭い。数郡規模といっても過言ではない。基本的には、常滑の卓越地域でありこの製品と同種のものを作成しているのであるから、補完的な意味が強い。対照的に日本海側の須恵器系陶器窯製品の分布が数国規模と大きな分布圏を形成するのは、この地域の経済活動の範囲がもともと大きいことを示している可能性がある。

脇本城出土の貿易陶磁器群とその周辺世界の様相

脇本城の出土遺物は大きくは国産土器・陶器と貿易陶磁器から組成される。小型の碗・皿さらには特殊品などに貿易陶磁器が多く組成され、大型の甕や日常用品である播鉢には国産の陶器が組成されるというおおまかな傾向を知ることができる。遺物相は、ほぼ十五世紀～十六世紀後半を主体とする遺物組成と見ることができる。小野正敏は非日常的な遺物が陶磁器群に組成されることについて、これらを「威信財」と見て、領主権力の様相が遺物に反影しているものとしている。この時期、貿易陶磁器の潤沢な供給量が保証され、流通の円滑化が保証されていることを示している。こうした遺物相に在地要求の事実を見いだすことができる。15世紀前半ころを中心とした時期に、交通の要衝などに、在地勢力の城館が営まれ初め、それは戦国期を通して営まれ続けてゆくということになる。それらの勢力は様々なレベルで相互に影響を及ぼし合っていた。遺物組成からみれば、興味深いことにある程度共通する遺物組成を持つことから、物あるいはそれが飾られる空間をも含めての価値観も共通していたのである。無論こうした状況には宗教勢力も無縁ではない。

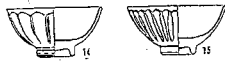
酒田を出、赤間関を經由し品川を目指す幕府領米積出船の所要日数は、早い船便で約1カ月であった。北陸と東北地方日本海側とは、海上交通を介して深い結び付きがあり、陶磁器の様相にもその一端が現れているのである。



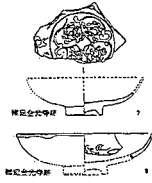
# 脇本城出土遺物の広がり

脇本城 文献96より

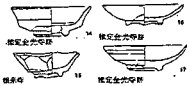
広域比較 文献37より



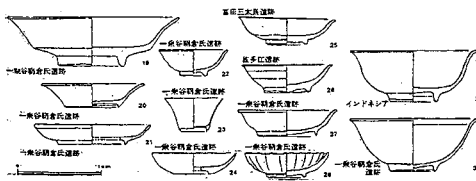
龍泉窯系碗B4類



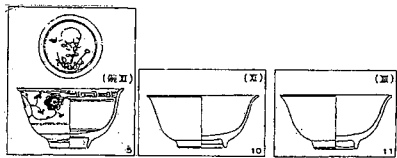
白磁碗皿B群



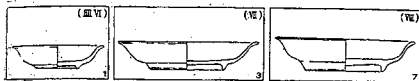
白磁碗皿D群



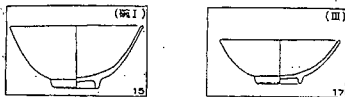
白磁碗皿E群



染付碗B群



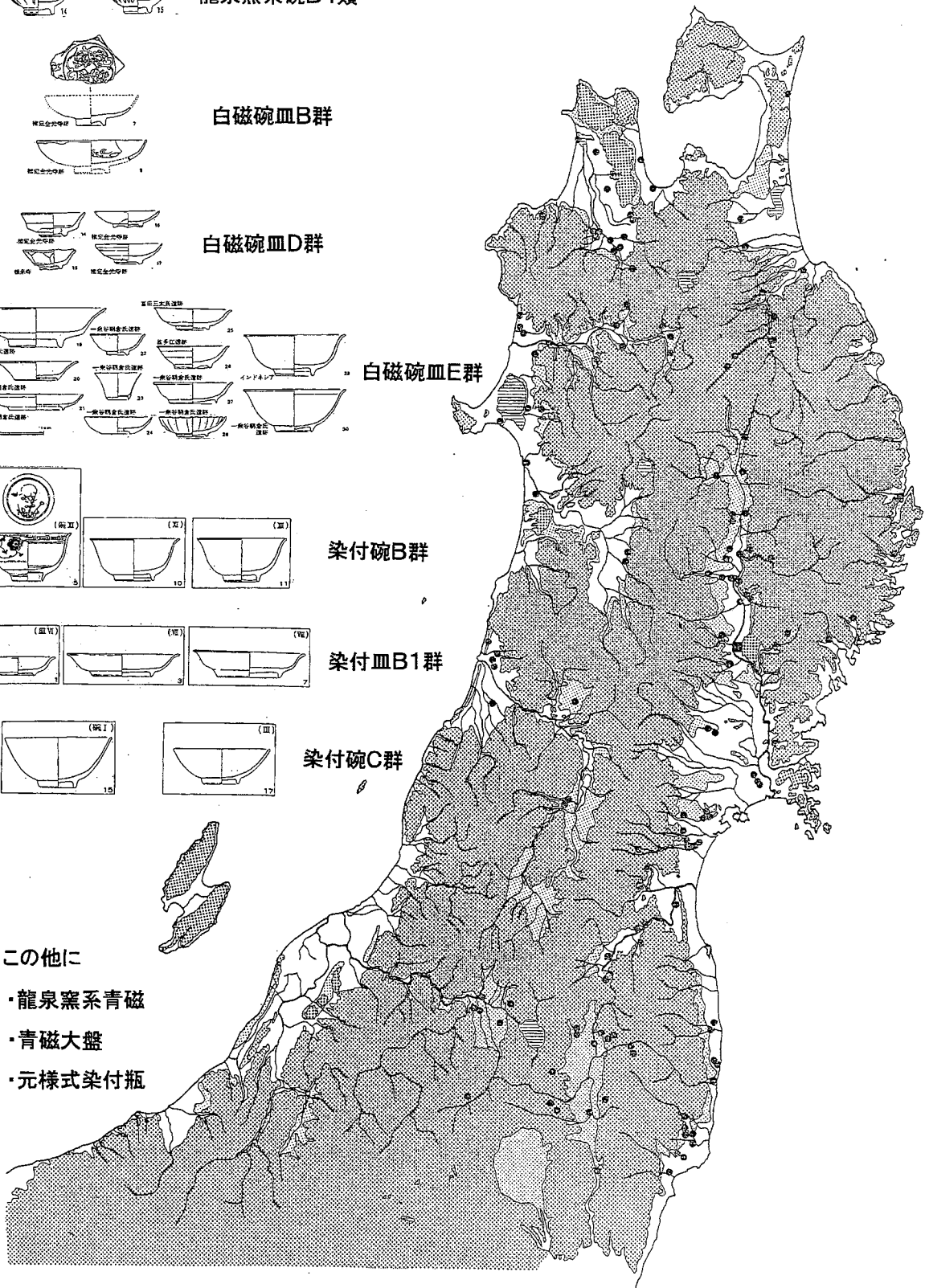
染付皿B1群



染付碗C群

この他に

- ・龍泉窯系青磁
- ・青磁大盤
- ・元様式染付瓶



# 鶴ヶ岡城の主な出土遺物

